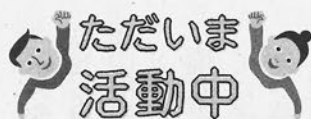


地中に眠る幕末遺構 次代へ



「神奈川台場を知っている人は手を挙げて」

横浜市神奈川区の幸ヶ谷小学校の体育館で、校長が全校児童に問い掛けた。神奈川区に残る遺構「神奈川台場」を紹介する子供向けの冊子が贈呈された。今年25日。数十人がぼつぼつと手を挙げると、冊子を作成した神奈川台場地域活性化推進協会の理事長山本博士さん(48)は、「もうちょっと

知っていてほしかったかな」と少し残念がりながらも、活動を一層広めようと胸に誓った。

神奈川台場は、横浜港の防衛のため勝海舟が幕末に設計し、横浜開港の翌年の1860年に完成した巨大な砲台場だ。周囲の石積みは、三浦半島で採れる粘土質の土や伊豆石と呼ばれる硬い石で造られ、14門の大砲が設置された。実戦に使

われることはなく、国外から来賓を迎える時などに祝砲や礼砲を鳴らすなど儀礼的な役割を担った。

99年にその役割を終えると、工業化や都市開発の波を受け周辺は埋め立てられた。現在は高層マンションが立ち並び、JRの貨物線が走るが、所々で石積みの一部が露出する。山本さんは、「関東大震災や横浜大空襲によって、幕末開港期の歴史を伝える建物はほとんど壊れてしまった。神奈川台場はほとんどが当

時の状態で地中に残っている貴重な文化財だ」と語る。

保存と活用を模索するため、前身の「神奈川台場を守る会」が設立されたのは1992年。横浜市立大学の学長らと発掘調査や研究を続け、2002年には「神奈川お台場保存協議会」として調査結果をまとめた冊子を刊行した。子供向けの新たな冊子は、今年の明治維新150年に合わせ、地域の子供たちに魅力を知ってもらおうと編集した。

冊子には、勝海舟をイメージしたキャラクターを登場させ、神奈川、西、中区の計37校の公立小学校の6年生の全児童を対象に配布

した。冊子を執筆・監修した横浜開港資料館の西川武臣館長(63)は「冊子に書かれたルートを歩いて石積みに触れてもらい、当時の人々の息づかいを感じてほしい。横浜の国際都市としての歩みを知ってもらい、街に誇りをもってもらえたら」と話す。

従来の冊子と比べて親しみやすいこともあり、「そんな貴重な遺構があるなんて知らなかった」と驚きの声も寄せられている。山本さんは、「幕末の遺構に興味を持つ子を増やして、新たなまちづくりの担い手になってほしい。まちづくりは人づくりだ」と力を込めた。(樋口貞仁)

希少文化財 保存が課題

1992年に設立された前身の「神奈川台場を守る会」は、佐藤安春・元神奈川区長らが中心となって結成した。その後、商工会議所の外郭団体や一般社団法人となり、2013年に公益社団法人化した。正会員は法人が10社、個人が11人。会員の中心は横浜市内の小企業だ。

に埋まった埋蔵文化財は、土木工事などで見つかった場合、発掘調査などを経て記録を保存すれば取り壊すこともできる。数少ない遺構をいかに保存するかが課題だ。

山本さんは「地域の人々が、日々の暮らしの中で街の誕生や歴史を感じる事ができる街づくりがしたい。石積みを公園のオブジェや噴水などに活用できれば、観光で活用できるかもしれない」と期待を込める。



贈呈式で児童のスピーチに耳を傾ける山本さん(中央)(横浜)市神奈川区の幸ヶ谷小学校で)



神奈川台場地域活性化推進協会の会員(同会提供)

神奈川台場のように地中

奈川台場地域活性化推進協

める。